

テレビ局：TBS	番組名：報道特集	放送日：2019年3月2日
出演者：金平茂紀、日下部正樹、膳場貴子、日比麻音子 金氏裕之（ディレクター、福島を取材）		
検証テーマ：オープニング、トランプ大統領が農産物の関税撤廃を要求 【特集】“合意に至らず”米朝首脳会談、【特集】川の魚は語る～原発事故後の福島		
報道トピック一覧 <ul style="list-style-type: none"> ・ オープニング ・ 東京江東区で80歳女性が強盗殺人の被害にあう ・ 広島男性強盗殺人事件で凶器の捜索 ・ 川崎市幸区でワゴン車が店に突っ込み二人が重軽傷 ・ 山形県で男女二人が死亡し息子夫婦から事情聴取 ・ 韓国ソウルのPM2.5対策 ・ 東日本大震災から間もなく8年で仙台市で犠牲者悼むモニュメント ・ 徳島鳴門海峡で渦開き ・ リオでカーニバル ・ 一昨年の栃木県那須町の雪崩事件で引率の教諭を書類送検へ ・ トランプ大統領が中国に農産物の関税撤廃を要求 ・ 東京葛飾区で火事 ・ 【特集】“合意に至らず”米朝首脳会談 ・ 【特集】川の魚は語る～原発事故後の福島 		
放送法第4条の見地からの検討・検証および該当トピックの報道内容要旨 <ul style="list-style-type: none"> ・ オープニング：結論→特に問題なし 番組の冒頭で金平キャスターが「決裂に終わった第二回米朝首脳会談への評価は様々ですが、冷徹な事実には北朝鮮の非核化が遠のいたことです。広島、長崎を経験した日本にしてみればもっと危機感が表明されても良かったのではないのでしょうか。米朝決裂、現地で何が起きていたのか、後ほどの特集でお伝えします。」とコメントしていた。このシーンに当てられたのは21秒で、放送法上は特に問題は見られなかった。 ・ トランプ大統領が中国に農産物の関税撤廃を要求：結論→特に問題なし トランプ大統領は1日、Twitter上に中国に対し牛肉や豚肉を含むアメリカの農産物に係る関税を全て直ちに撤廃するよう求めたと投稿し、その理由として1日までとなっていた中国との交渉期限を延長し、追加の関税措置を見送ったことを上げていていること、トランプ氏は「これは私達の偉大な農家にとって、そして私にとって非常に重要だ」として来年の大統領選挙で再選を狙う上で重要となる農業集での指示獲得につなげたいとする思惑も見え隠れしているとのことも伝えられた。このトピックについて当てられた時間は56秒で放送法上は特に問題は見られなかった。 ・ 【特集】“合意に至らず”米朝首脳会談 		

特集では米朝首脳会談が取り上げられ、以下に朱記したように VTR が流されていた。

[VTR1]

ナレ「今週、行われた、2 回目の米朝首脳会談。その舞台となったのは、かつてアメリカと敵対関係にあったベトナムの地だった。」

日下部「ハノイ郊外ですけれども、ちょうど、今、田植えの時期ですね。」

"日下部「ハノイで、アメリカと北朝鮮の交渉あるの知ってますか？」

ベトナム国民（吹替）「ええ、今日の午後から、この道路は大型車両が通行禁止になります。」

"

"日下部「アメリカは？ どう思いますか？」

ベトナム国民（吹替）「昔アメリカは故郷に爆弾を落としたのよ。」 "

ナレ「アメリカ、韓国などが支援した南ベトナムと、ソ連、中国などが支援した北ベトナムが戦ったベトナム戦争。実はこの戦争には、北朝鮮の兵士も加わっていた。」

"ナレ「それを物語るものが、ハノイの北東部、バグザン省に残っている。」

日下部「えーハノイから、60 キロほど来たところなんですけども、これがですね、ベトナム戦争で戦死した北朝鮮のパイロットの慰霊碑。何だそうです。そして慰霊碑の後ろはですね、すでに遺骨は北朝鮮に帰っているんですけども、14 名の墓碑、ハングルで書かれたですね、墓碑がこう並んでいます。」 "

ナレ「アメリカ軍と空中戦を繰り広げ、亡くなったという北朝鮮兵士の墓。2 1 年前からこの墓を管理し、供養を続けてきたザウさん。ザウさんも、北ベトナムの兵士として、南ベトナムやアメリカと戦って負傷し、膝の関節を失った。」

"日下部「これは撃たれた？」

日下部「北朝鮮のパイロットたちが、ベトナム戦争に参加した背景などのことをザウさんご存知ですか？」 "

ザウ氏（吹替）「彼らは、ベトナムの戦闘方法を学ぶために来たんです。」

ナレ「その北朝鮮とアメリカのトップが、ここベトナムで会談することになったのだ。」

ザウ氏（吹替）「ベトナムとアメリカはあのように戦争していましたが、今は膝を突き合わせて、経済協力や投資などについて話し合っています。ベトナムとアメリカの関係がこうなったのだから、北朝鮮もどうすれば合意できるようになるのか、考えるべきでしょう。」

ナレ「首都、ハノイの中心部には、こんな場所がある。」

日下部「あっ、あった。あれだ。ただの鉄くずに見えるかもしれませんが、あれはですね、ベトナム戦争の時に撃墜されたアメリカ軍の b-52 爆撃機の残骸です。いまだにこう、ハノイのですね、町の一角の池の中にこう b-52 のですね、残骸が残っています。」

ナレ「ベトナム戦争を記憶にとどめるため、モニュメントとして残されたアメリカ軍の爆撃機。この街で生まれ育ったルエンさんは爆撃機の墜落をまさにこの場所で見たといい。」

ド・サン・ルエンさん（83）（吹替）「1972 年、12 月 27 日、23 時 5 分。花を上に出たら、助けを求める声がして、地下壕にいた 3 人が死にました。」

"日下部「もっと残骸いっぱいあったんでしょ？」

ルエン氏（吹替）「ええ、それを溶かして、鍋や、バケツ、やかんやお盆などを作りました。若いころはアメリカ打倒ばかり言っていました。今は普通の関係です。」 "

ナレ「アメリカとの、国交を回復し、経済発展を続けるベトナム。今やアメリカは、最大の輸出相手国となった。北朝鮮とアメリカとの関係はどうなるのか。注目の会談が始まった。」

[VTR2]

ナレ「今週、世界が注目する中に行われた、米朝首脳会談。」

"記者（字幕）「金委員長 非核化の意思はありますか？」

金委員長（字幕）「意思が無かったら、この場に来ることはなかった」

トランプ大統領（字幕）「いい答えですね。今まで聞いた中で最高かも」 "

"ナレ「順調に進むかのように見えた会談だったが、この後、状況は一変する。」

日下部「車が離れていきます。どうも会談のスケジュールに大きな変更があったようです。予定より早くですね、二人の首脳が、えー会談場でありますホテルを離れました。」 "

ナレ「昼食会は中止となり、両首脳の合意文書への署名は見送られた。トランプ大統領は、予定より 2 時間前倒しで、会見を行った。」

トランプ大統領（字幕）「私たちがポンペオ国務長官も何か文書に署名するのは、良くないことだとの考えに至りました。いくつか選択肢があったが、今回はそのどれも選択しないと決めた。北朝鮮は” 制裁の全面的な解除” を求めてきたが、それには応じられなかった。彼らは我々が求める地域の大部分で非核化をすると言ったが、それでは制裁解除できない。」

ナレ「そのうえで、トランプ大統領は、今後も北朝鮮と交渉を続けていくと述べた。」

トランプ大統領（字幕）「金党委員長は昨夜状況にかかわらず、ミサイル発射や、核実験もしないと私に約束した。私はそれを信用する。」

ナレ「一方、北朝鮮側は、同行しているリヨンホ外相らが、未明に緊急会見を行った。」

北朝鮮 リヨンホ外相（字幕）「私たちが要求するのは、” 全面的な制裁解除” ではなく、” 一部解除” 経済、人民生活に支障を与える項目だけ、先に解除しろということだ」

ナレ「北朝鮮が制裁の全面的な解除を求めてきたとするアメリカ側に対し、北朝鮮側は、要求したのは、制裁の一部解除だとしていて、主張は対立している。さらに同席したチェソンヒ外務次官は」

チェ・ソンヒ外務次官（字幕）「アメリカ側は千載一遇の機会を逃した。（金正恩）国務委員長は今後の” 朝米間の取り引き” について、意欲を亡くされたのではないか」

ナレ「会談翌日、北朝鮮の国営メディアは、両首脳が合意に至らなかったことについては、触れなかった。朝鮮労働党の機関紙、労働新聞は、建設的かつ、率直な意見交換を行ったと、報道。」

"ナレ「朝鮮中央テレビは、」

アナウンサー（字幕）「最高指導者はトランプ大統領が遠路はるばる来られ、今回の再会と会談の成果のために積極的な努力を傾けたことに謝意を表され、新しい再会を約束されながら、別れの挨拶を交わされました。」 "

ナレ「各国の記者は今回の会談をどう見たのか」

"日下部（字幕）「首脳会談の印象は？」

台湾東森テレビ王祥齡記者（吹替）「とてもびっくりしました。だれもこうなるとは思っていませんでした。勝者はいません。誰もが合意をできると思っても、何の合意もできない。リアリティーショーのようなものでした。」 "

アメリカ VOA ナターシャ・モズゴバヤ記者（吹替）「今回の会談への期待は、あまり大きくはありませんでした。基本的にはすべてがトランプの楽観主義にぶら下がっているような感じでした。お世辞が多用されたし、金氏は最初から懐疑的な様子でした。」

"ナレ「ワシントン・ポスト紙は、こう伝えた。」

ワシントン・ポスト紙（吹替）「トランプ氏を不動産王に押し上げたカリスマ性や勝負師の才能が外交問題の領域

では通用しないことを印象付けた。」

ナレ「金正恩党委員長が、アメリカに対し強く求めた経済制裁の解除。北朝鮮国内にどんな事情があるのか、アジアプレスの石丸次郎氏は北朝鮮にいる複数の取材協力者からに米朝交渉への思いを取材し、その声を録音してきた。」

ナレ「去年、6月、史上初の米朝首脳会談の直後には、」

北朝鮮在住の取材協力者（去年6月）（字幕）「アメリカと会談するのを見て、すごいと人々は言っている。（金正恩）元帥は天才に違いないと。祖父、父親ができなかったことをやっているわけですから。」

ナレ「だが、経済制裁は解かれず、生活はよくなる。7カ月後の今年一月には、2度目の米朝会談への期待は薄れていったという。」

北朝鮮在住の取材協力者（今年1月）（字幕）「結局変化がないから、『トランプというやつ詐欺師じゃないか』とみんな言います。（韓国ともアメリカとも）会談をやったのに、まったく変化がありませんでした。現実はよくなりませんでした。期待なんて捨ててしまいました。国は何もしてくれません。」

ナレ「北朝鮮の外貨獲得の柱である、石炭と鉄鋼石の輸出は、経済制裁で完全にストップ。去年の中国への輸出総額はおよそ9割減となった。石丸氏はこう話す。」

石丸氏「輸出そのものの、こう息の根を止められかねないような非常に強い制裁を受けることで、国民にやっぱり負担、不満が高まっていきます。このまま制裁が続いて、外貨が枯渇するようになるところになる、干上がってくるようになるそうですね、これは政権運営に非常に大きな打撃になるということはやっぱり十分分かっていると思います。」

ナレ「米朝会談の翌日、日下部キャスターは韓国、ソウルに移動し、市民に話を聞いた。」

ソウル市民（吹替）「とても残念です。朝鮮半島に平和が訪れる非常に良い機会だったのに。特に終戦宣言がなされることを期待したのですが、」

ソウル市民女性（吹替）「お互いに大きな期待を持ちすぎ、互いに違う絵を描いていたのではないのでしょうか。一日も早く3回目、4回目の会談が行われ、良い成果が得られればと思います。」

ナレ「米朝首脳会談を特別な思いで見守る男性がいた。下着メーカー社長のイ・ジョンドクさん。北朝鮮南西部、ケソン工業団地で工場を運営してきた。」

ジョンドク氏（吹替）「閉鎖されたときには、350人が働いていました。ケソン工業団地は経済的な場所ですが、残念ながら今まで、政治的なことに左右されてきました。」

ナレ「ケソン工業団地は、2004年に操業開始。イさんの会社をはじめ、多くの韓国企業が進出し、北朝鮮の労働者が働いてきた。だが、北朝鮮による核実験や、弾道ミサイルの発射を受けて、2016年に操業が全面的にストップした。」

ベトナムはですね、

ナレ「ケソンの工場に、およそ8億円の投資を行ってきたというイさん。その操業再開を期待していたが、次第に重い空気に包まれていく。合意に至らないとの見方がニュースに伝えられると、」

ジョンドク氏（吹替）「すべてのことが理解できないし、信じられない状況です。」

ナレ「ケソン工業団地企業協会のシン・ハンヨン会長もイさんと共に立ち上がり、涙をぬぐった。」

ジョンドク氏（吹替）「これも非核化までの一つの過程だと思い、耐えなければならぬでしょう。一方でいつかやってくるその日まで、耐えられる体力があるかどうか分かりません。惨憺たる状況だと思えます。」

ナレ「今回の米朝首脳会談について、ソウルにある北韓大学院大学 ヤン・ムジン教授に聞いた。」

日下部「合意が今、まあ、会談が終わったと聞いた時に、率直にどういう感じがしましたか？」

ムジン教授（吹替）「今の状況を見たとき、会談は一時中断しますが、両者が決別するという要素はどこにも見当たりません。会談決裂ではなく、むしろ合意猶予と見るほうが私は説得力があるように思います。」

ナレ「一方で、ヤン教授は、アメリカの大統領選が近づくとつれ、北朝鮮は様子を見るケースが多くあると指摘。こう強調する。」

ムジン教授（吹替）「北朝鮮と、アメリカの国内政治の日程を考えると、来年合意するということは、非常に難しいと思います。米朝間が合意して履行しようと、少なくとも今年しか時間がありません。今年しか時間がないとしたら、結局、韓国が積極的に仲介して、早く、少なくとも今年の前半には、米朝の間で今回まとまらなかった合意書を取りまとめていく必要があるのではないかと考えます。」

スタジオでは以下に朱記したやり取りが繰り返り広げられていた。

膳場「えー去年6月の1回目と今回と、日下部さんは首脳会談を現地で取材してきましたけれども、どうでしょう、各国メディアの期待感や熱気などに違いってありましたか？」

日下部「あのーシンガポールと同じようにですね、だいたい3000人の記者登録が今回もあったんですけども、プレスセンターにいてもですね、記者の反応っていうのは、どっか冷めてましたね。あの、ホスト国のベトナムはですね、何とか会談を盛り上げようとするね、シンガポールの時の時の数倍もある、巨大なモニターをプレスセンターに置いたんですけども、食い入るように見ている人って、本当にわずかでね、金平さんこれ、特にアメリカのメディアはですね、国内ニュースの方に 관심이向いていたんじゃないですかね。」

金平「あのね、僕は実は東京でアメリカのニュースずっと見てたんですけどね、実はそこで報じられていたのは、トランプ大統領のロシア疑惑に関する公聴会。ずーっとえんえんとやっててですね、向こうではそれがトップニュースなんですよ。で、こういう足元の国内事情っていうものを考えると、トランプ大統領ってのは、いわゆるちゃぶ台返しでひっくり返さざるを得なかったんだろうというふうに思いますですね。特にその、ボルトンとかポンペオという側近が、こういう大甘な文章を出すとするね、かえって国内で批判されんじゃないかという日下部さんはこれで、その米朝接近っていうのは、破綻したって言う風に思いますか？」

日下部「うーん、まあ最高指導者が列車で3日かけて会場行って成果が無かったっていうんですから、まあ金正恩としてはメンツを失った形ですけども、まあ普通に考えればですから3回目の会談は、そうとう遠のいたのかなと思うんですけども、どうなんでしょうね。シンガポールの時も直前になって北朝鮮が高圧的な態度をとって、トランプ大統領がじゃあ辞めたって言って。そうすると北朝鮮は必死になって取りなして、会談にこぎつけたっていう前例もありますよね。とにかく北朝鮮としては、一刻も早くこの、経済制裁を解除してくれないとたちいかないわけですよ。そしてこの危機を打開してくれる交渉相手っていうのは、もうトランプ大統領しかない北朝鮮は持ってるわけですよ。ですからこれまでのものさしでは測りきれない展開っていうのは、私は今後あるんじゃないかと思ってます。」

この特集に当てられた時間は1351秒で、放送法上は特に問題は見られなかった。

・【特集】川の魚は語る～原発事故後の福島

福島原発事故の影響について福島第一原発付近を流れる前田川とその魚の様子が特集で取り上げられていた。

[VTR1]

ナレ「去年、11月、小さな川の中で、大きなオスのサケが網にかかっていた。」

ナレ「東京電力福島第一原発。そのすぐそばを流れているのが、前田川だ。河口の近くでは、津波で壊れた護岸の工事が進む。緑色は、放射性廃棄物をつめたフデコンバグの山。」

ナレ「前田川は、およそ 15 キロの短い川だが」

男性「あーウナギ。ウナギ。よっしゃ。うなぎ。逃げるからマジで。」

ナレ「魚をはじめ、生き物の種類が非常に多い。」

男性「ウグイの仲間」

ナレ「福島大学、環境放射能研究所との。和田淳教授らは、各地で魚類の放射能調査を続けてきた。前田川流域は、ほとんどが帰還困難区域で、おとし調査が始まったばかり、原発からほど近く、重要な調査地点だ。」

ナレ「震災の傷跡が残る二葉町の住宅街もいまだに帰還困難区域だ。特別な許可を得て。川の上流側に入る。」

ナレ「調査地点は、河口から源流部までの 5 地点。そのうち第四地点の放射線量が、最も高い。橋のたもとで線量が跳ね上がった。」

"男性「100（ミリシーベルト）越えました。」

男性「なんか超えていますね。」

日下部「すごいな。」

男性「原発の事故が起こった 2 号機とかと早退して変わらない非常に大きな前とかですね。」

和田教授「この辺はあの、あれですね。こう原発から、こう、沈着した量がたぶん一番多いところですね。双葉町の南側で、局所的ですけども、この辺は非常に線量が高いところになっております。いまだにまあこういう局所的に高いところとか、全体的にも、高い、ただちょっと離れると、急激に下がるってということなんで」

ナレ「第四地点の平均線量は、およそ 10 マイクロシーベルト。」

ナレ「一方、下流に数キロ下った地点では、ぐっと下がる。川や沼で捕った魚は、環境放射能研究所に持ち帰る。」

"研究員「782.3」

ナレ「筋肉、消化管、生殖腺などの部位に分けていく。」

ナレ「そのサンプルを、測定機にかけて放射線量を測る。こうして前田川をはじめ、各地で魚の線量を調べることにより、様々な放射能の影響が、見えてきた。」

ナレ「前田川の最上流、ここにはヤマメやイワナが生息している。」

研究員「天然のヤマメですね。きれい」

ナレ「溪流魚は、主に森の中の昆虫を食べている。森が放射能で汚染されていると、魚も汚染される。魚など一般食品の放射能基準値は、100 ベクレル。この川の子ヤマメからは最大で、1720 ベクレル、平均 657 ベクレルの放射性セシウムが、検出された。イワナは平均 154 ベクレルだった。イワナよりヤマメの方が、線量が高い結果なのは、なぜか。」

和田教授「ヤマメの方が若干、高く出る傾向があります。イワナに比べて、まあどちらも水生昆虫、陸生昆虫を食べるんですけども、ちょっと食べてるものが違うんじゃないかな、あのヤマメの方が陸生の甲虫類、コガネムシとかああいう系のもの、ですね。」

ナレ「甲虫は、幼虫の時、土や木の中で成長する。森が汚染されると、虫も汚染されやすいのだ。」

"和田教授「遡上しているアユです。」

ナレ「アユは、川底の石などについた珪藻類などを食べる。」

ナレ「太い線に見えるのは、アユが食べた跡。食み跡だ。寿命が一年と短いことから、アユを調べることで、その年の川底の汚染の程度が分かるという。」

ナレ「アユの線量は平均で 438 ベクレルだった。」

ナレ「一方川魚の中でも鯉は低めで、平均、136 ベクレル。」

和田教授「ウナギでございます。ようやくお目当ての。は一。取れました。はーウナギだ。」

ナレ「ウナギは、海老や小魚、虫などを食べている。これまでの福島県内の調査などで、肉食性の魚の方が、線量が高いことが分かってきた。」

ナレ「この川のうなぎはおよそ 500 ベクレル。最大で 1 0 0 0 ベクレルだった。ウナギは下流の魚の中では、線量が高い魚と分かった。食物連鎖で上位にいることを示す結果だ。」

和田教授「いたよ。サケ。たぶん死んでる死んでる。」

ナレ「一方、秋になると海から上ってくるサケは 1.3 ベクレルから 2 ベクレル。川に入って間もないため、淡水の魚と比べると、放射線量が非常に低い。各地で行われる魚の線量調査。原発事故から 8 年が経とうとする今、その影響が明らかになってきた。」

[VTR2]

ナレ「白鳥たちが列を組んで泳いでいる。広大な湖にも見えるこの場所は、ウクライナにあるチェルノブイリ原発の冷却水貯水池だ。33 年前に爆発を起こした 4 号機はここだ。」

ナレ「おとしから福島大学の研究者らは、現地の専門家とチェルノブイリの立ち入り禁止区域で共同調査を行っている。この貯水池での魚類調査も柱の一つだ。」

和田教授「魚の種類は違うし、湖の大きさは違うけれども、基本的なメカニズムは同じなので、まあたぶん、そのチェルノブイリで起きているってことも、福島で起きるだろうし、逆に福島に起きていることもこっちで起きてると思いますし。そういうのは、比較対照できるってのは非常に大きいかなあと」

ウクライナ人（字幕）「何もいないぞ、何も。なんて静かなんだ。」

ナレ「池にいる様々な種類の魚を捕獲し、原発事故の放射能の影響を調べる。」

ウクライナ人男性（吹替）「そんなにたくさんじゃないけど、十分でしょう。」

ナレ「バケツが魚でいっぱいになっていた。」

和田教授「これが日本にい鯉と同じですよ。で、これが、パーチと言っているこれがラド。」

ナレ「日本ではなじみのない魚もいる。パーチは肉食の魚で、放射線量も高い。」

ウクライナ人男性（字幕）「モンスターパーチだ」

和田教授（吹替）「パーチの放射性セシウム線量は、1 万ぐらい？」

ウクライナ人男性（吹替）「1 万ベクレルから 1 万 5 0 0 0 ベクレルです。」

和田教授（吹替）「福島で一番汚染されているバスは 1 万ベクレルぐらい。近い数値です。だから比較しやすいです。」

ナレ「事故直後のパーチの放射線量は、数十万ベクレルだった。その後は・・・」

グトコフ研究員（吹替）「事故後、5、6 年は、貯水池でも、放射線量は急速に減少しました。その後緩やかな減少になり、例えば魚のストロンチウムは 10 年ぐらい横ばいでした。」

ナレ「しかし、最近魚も水も放射線量が増加に転じている。原発の廃炉の一環で給水ポンプが止められ、貯水池の水位が 5 メートルも低下したためだという。例えば、ラドという魚の場合、放射性ストロンチウムの値は年々増えている。」

グトコフ研究員（吹替）「今は、水の量が減ったことで、放射性物質の濃度は高くなり始めました。」

ナレ「除染しなくても年を経るごとに放射線量は減少していくが、環境の変化がきっかけで、線量上がることもあるのだ。」

ナレ「大物が釣れた。大鯰だ。」

和田教授「ヨーロッパナマズ」

男性「ナマズじゃないかなと思います」

和田教授「ナマズはやっぱり、たぶん肉食なので、ためやすいかもしれないですね。」

男性「98。全長で98ぐらいですかね。」

和田教授「阿武隈川のキャップの最大が77」

男性「超えましたね」

ナレ「さらに、去年、福島大学のチームが同じ池で、1.6m、27キロのナマズを捕獲した。10年は生きていとみられる。放射線量は、6000ベクレルを超えていた。日本側は、貯水池に生息するこのナマズに着目している。その理由は」

ナレ「魚などの、耳の奥にある耳石には、木のように年輪が一年に一本形成される。そこには、放射線量など、環境の変化も細かく記録されている可能性があるという。長生きの大鯰の耳石を調べることができれば、原発事故後の、長期的な環境の変化も知ることができるのだ。」

ナレ「魚類の放射能調査をはじめとした日本とウクライナの共同調査は2022年まで続く予定だ。」

ナレ「鯉がみなもでひしめき合っている。原発からおおよそ60キロ離れた福島県郡山市にある酒蓋池。震災前までは、食用の鯉の養殖に使われていた。東にある福島第一原発から、事故後、放射性物質が飛んできた。震災直後の、郡山市内の放射線量は、酒蓋池がある市の中心部が高かった。」

熊田組合長「震災になってから、一番ここが強かったんですよ。沼の中で。で、ここでじゃあそれそんなに強いんだったら、あの一試験しようっていうことで」

ナレ「養殖業者は原発事故後、この池からのコイの出荷を停止。4年前、放射能汚染の影響を調べる実験用として、コイを育て始めた。実験は福島大学、内水面水産試験場、郡山市などが協力して行っている。」

ナレ「鯉は、どのように放射性物質を取り込んでいるのか？いけすの中のコイと、いけすの外のコイを比較した。」

ナレ「毎月、いけすの中と外のコイをとって、放射線量を調べた。その結果、いけすの中のコイは、平均9ベクレル。外のコイが23ベクレルで、いけすの外のコイの方が、2倍以上高いことが分かった。」

ナレ「それはなぜか。いけすの中のコイは、主に人口飼料を食べるが、外のコイは、人口飼料の他、池の中を動き回って、好きなものを食べている。」

ナレ「鯉は、池の底にたまった堆積物を口に入れる食性があるって、堆積物から、放射性セシウムを取り込んだ可能性が高いことが分かった。」

ナレ「一年に1度、酒蓋池の水が抜かれる。昔から農家などが続けてきた池のかい掘りだ。水を抜き、ヘドロなどを流して水質などを改善。池の底を日に当てて消毒するために行われてきた。5日以上かけて、ゆっくり水を抜いていく。水位が下がると、ある生き物が現れた。テナダ。魚をくわえている。いつの間にかこの池に住み着いたのだという。」

テロップ「水面をたたいて網に魚を追いこむ」

ナレ「今年も、たくさんの魚が網にかかった。このかい掘り、調査では、コイ以外の様々な種類の魚の放射線量ををはかり、数値を比較するという目的もある。」

男性「ウグイですね。」

男性「コクチバス」

ナレ「この酒蓋池の環境を巡っては、おとし、大きな動きがあった。一年をかけて、大規模な池の除染が行われたのだ。この除染の半年後、池の環境がどの程度改善されたのか、調査が行われた。」

ナレ「いけすの北側の地点で、泥を底から40センチの深さまで、採取して比べたら、セシウム137の総量が除染前の、おおよそ7分の1に下がった。しかし池の底、表層の部分では、1万5000ベクレルだった。8000ベクレルを超えると、指定廃棄物として、特別な処理が求められるレベルだ。」

ナレ「かい掘りの日、福島大学がこの調査結果について、関係者に報告した。」

難波教授「除染で相当浅いところは全部なくなっているんじゃないかってふうに期待はしたんですけど、私たちとしては意外に残っているかなというところなんです。雨の時期のなか、ほどね、掘ってますので、その雨で運ばれてきたもの、寄与している可能性もあります。ただ取り残しなのか、その、後で入ってきたのかは今後の推移をみないとはっきりしたことは言えないだろうと思います。」

熊田組合長「完全にとる何ちゅう訳には、行かないんだがな—それでやってもらったって」

難波教授「そうですね、完全に採るってのは、難しい分が」

ナレ「報告会には、東京電力の社員も、同席していた。」

熊田組合長「東電の人たちにも、放射能は今こんな状況だと素直に言っていただければ、助かるんですよ。で、向こうから偉い人が来て、月に一回とかなんか見れば一番ええんだけどな。」

ナレ「一方、池のコイの放射線量は除染の結果、4年前の平均23ベクレルから、およそ3分の一の8ベクレルになっていることが分かった。」

ナレ「郡山市は、今でも、食用の鯉の生産量が全国一の町だ。しかし、養殖業者たちは、風評被害に苦しんでいる。」

ナレ「コイの養殖業組合では、酒蓋池など4つの池での養殖を、休止し、市の西部など、汚染度が非常に低い池でコイを育てている。養殖のコイのモニタリングでは、2014年以降、1度だけ、10ベクレルのコイが見つかった他は、放射能は全く検出されていない。」

ナレ「郡山市西部にある北沢池。その下にコイのプールがある。養殖業者は、きれいな地下水の中でコイに泥を吐かせて臭みを抜く、畜養をした後で、出荷してきた。」

ナレ「あの、原発事故のあと、組合長の熊田さんらは、畜養をすると、コイの放射線濃度が下がることを発見したという。」

熊田組合長「フナは同じコイ科の魚なんですけども、フナは抜けませんね。コイはやっぱり新陳代謝が激しい魚なんだと」

ナレ「ごくわずかな放射能にも、神経をとがらす養殖業者は、およそ20日間の畜養を経て、コイを出荷している。」

熊田組合長「検査して、ちょっとでも5でも10でも出れば、出荷できませんから。もう基準値100と食べられる奴は100以下ならオッケ—と言っても、お客さんはダメです。100以下なんて、そういうのは、それはゼロじゃないと、絶対ダメ」

ナレ「コイが放射能を排出するメカニズムが、科学的に解明されるのは、これからだ。今も各地に放射能の影響が残る原発事故。魚たちは、身を持って多くのことを語っている。」

VTR を承けてスタジオでは以下に朱記したやり取りが取り上げられていた。

膳場「取材した金氏ディレクターです。あの同じ水域に生息している魚でも、こう種類が李がってくると、放射線の数値も大きく変わってくるものなんですね。」

金氏「あの放射能は見えないので、川で魚をとってる時はわからないんですけども、あの線量の測定結果が出て、それぞれの魚ですね、習性ですとか、特徴、さらに周りの環境でぜんぜん線量が変わってくるっていうのには、驚きました。原発すぐそばの前田川が非常に豊かな川で、これだけ多くの種類の魚が住んでいるからこそですね、事故の影響についていろんなことが分かってきたんだろうと、逆に皮肉だなあと感じも申しますね。」

金平「それにしても金氏さんね、事故から33年もたっているそのウクライナの川魚の状態ってのは、なんか非常に考えさせられるものがあったんですけども、その福島との比較研究ですね。これはその意味では非常に時間

軸の長さってことを考える意味でも非常に有益ですよ。」

金氏「はい、あの今のチェルノブイリと福島第一原発近くの池から湖で見ますと、魚などの放射線量が同じくらいではないかという見方もあるんですね。あのご覧になった印象は、チェルノブイリの方がまだまだ線量が高いと思われるかもしれないんですけども、あの一実際に福島原発近くの沼でも、おとしに、オオクチバスという種類の魚から、1万数千ベクレルというのが検出されていて、チェルノブイリと同じようなレベルです。だからこそ、両方で調査するというのも意味があるんですね。」

日下部「あの汚染の影響というのは、天然の魚とですね、養殖の魚。これは違うわけですよ。」

金氏「そうですね、あのまず養殖の魚の場合は、あの郡山の養業組合が取り組んでいますように、汚染されていない場所をまず選んで、えー安全な餌を食べさせることなど、でですね、二重、三重、四重で人間の手で管理ができることが調査の結果からも分かってきています。一方で天然の魚の場合は水が汚染されていないけれども、あの森をはじめとした周囲の環境が汚染されていると、魚も線量が高くなってしまいます。森の汚染が原因で流域全体をですね禁漁にせざるを得ない阿武隈川。などそういう川がですねまだまだ残っています。広大な森林をですね全部、除染しろといってもですね、まず不可能で、えー除染できないところだと放射能が自然に減っていくのを待つしかないというのが現状ですね。」

膳場「はい、以上特集でした」

放送法上は特に問題は見られなかった。

最高裁判例の見地からの「印象操作」に関する所見および該当トピックの報道内容要旨

特になし

検証者所感

・オープニング

金平茂紀キャスターは冒頭では「決裂に終わった第二回米朝首脳会談への評価は様々ですが、冷徹な事実には北朝鮮の非核化が遠のいたことです。広島、長崎を経験した日本にしてみればもっと危機感が表明されても良かったのではないのでしょうか。米朝決裂、現地で何が起きていたのか、後ほどの特集でお伝えします。」と述べていたが、広島や長崎を日本が経験したとは言っても3四半世紀も前のことであり、しかも日本の一部の地域の話しであるから、「もっと危機感が表明されても良かったのでは」と求めるほどの当事者意識は良くも悪くも現代の日本人にはないのかもしれない気がした。

ところで、先週は特集で沖縄と米軍基地を巡る県民投票が取り上げられていたが、米朝関係や南北朝鮮関係の動向によっては沖縄基地問題も新たな展開を見せるのではないだろうか、気になるところである。